
好きな人

千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Nコード】

N7801A

【作者名】

千里

【あらすじ】

一緒にいたいと思った人とずっといられると思っていた。

ブログ

病室の中で一緒にみた夕陽

このまま時間が止まればいい

いと思った

大人にもならないで、ただ二人っきりのままで・・・

ただ私は健康な体と時間が欲しかった

浅田雪太

赤ちゃんの頃からずっと病院で育ってきた。

先天性の病気で、かなりの重い病氣らしい。

保育園に行ったことがあるのは、指で数えられるくらい。

当然、友達はいなかった。

だったら、初めから通んなきゃいいのにつて、母親と父親に対して
して小さいながらずっと感じていた。

そんな母親と父親は、私に太陽のように元気で明るい子になってほ
しいと、陽子という名前をつけた。

名前と反対の状態で産まれてきてしまったのが、凄く苦しかった。

病院ですつといたので、ナ

ース全員の名前も医者全員の名前も知っていた。

自分と一緒に産まれつき病氣にかか

っている子供がいた。

友達といったら、その子たちくらいだ。

この病院を去る子といったら、完璧完治して退院していく子が、大
人になれず、自分の夢が叶わず生きていくことができなかった子の
どちらかだ。

その中で私は、早く元氣になりたい
とか、素敵なお嫁さんになりたいとかいう夢をもつことができな
かった。

彼がこの病院に

きたのは、私が小学校4年生の頃だった。

その頃

の私は、学校に行けなかった毎日がとても退屈で、退屈で．．そ
れでとても苦しかった。

「母さん、凄くきもちわるい
んだケド。」

「またそんなウソ
をつく！いつもそんな弱音みたいなこと言っていると、いつになつて
も治らないわよ。」

母さ

んは私の病気が治ると信じている。いつ治るかもわからない、死ぬかもしれない病気なのに・・・。

「じゃあ、ア

ツコはなんであんなに強気でいたのに、死んだの？」

「・・・アッコちゃん

んは頑張ったのよ！あんととは違って、頑張ってたわ！アッコちゃんは・・・。」

「でも、アッコは死んだ・・・。」

アッコは小さい頃からの友達で、私と同じくらい重い病気だった。とても明るくて、看護師になる夢を持っていた。アッコが死んだのは去年の冬頃だった。

「アッコちゃんは頑張ったんだから、あんとアッコちゃんの分まで生きなさい。」

そういう

と母さんは悲しそうな顔をして、ベッドのとなりの花瓶の水を取り替えに行った。

「カワムラヨウコちゃん？」

病室の入口に背の高い、年上くらいの男の子が立っていた。

「誰

ですか？」

「あつ、

ごめん！いきなり声かけて驚くよね。俺、今日から入院する浅田雪太。変な名前だけど、よろしくね。」

そう言いながら、変な顔をした。

なぜだか、私はアッコを思い出した。

「ユキタくん？ごめん、あたし今母さんと喧嘩して機嫌悪いんだ。だから・・・。」

「あつ、母さんってさっき花瓶持っていった人？挨拶してこよつと！」

そう言うと、雪太は小走りで母さんのいるところ
に行った。

しばらくすると、母さんと雪太と雪太のお
母さんらしき人が病室に入ってきた。

「陽子、雪太君とはもう挨拶した
んだよね？あんた、仲良くしなさいよ、同い年なんだから。ねっ？
雪太君」

「あつ、はい！」

「よろしくね陽子ちゃん」

雪太はまた変な顔

をしながら私に挨拶をした。

雪太はどこかアツコに似た、明るい人だった。

彼の病氣

雪太が入院してきて、一週間が経った。

雪太は毎日のように私の病室に遊びに来た。

「陽子！おはようっ！」

「おはよう。雪太君、あのさ、雪太君きてから、勉強が出来ないんだけど！」

「ごめんねえ。でもオレ、退屈でさあ！初めにこの病院で話したの陽子だからさ。」

「あたし以外にも、入院してる子たくさんいるじゃん。その子たちとお喋りすればいいじゃん」

「だってオレより年下ばっかだもん！同い年は陽子しかないし。それにオレもうすぐ、治療がきつくなるらしいしさ！」

少し雪太の顔が暗くなったような気がした。

「ねえ、陽子の病氣って何？」

「あたしの病氣は・・・心臓の病氣なんだって。だから、いつになっても治らないんだ。」

「・・・やっとなちゃんとしやべってくれた！」

雪太がいきなり笑顔になって、大きな声を出したから、少し驚いた。

「何！？いきなり！あたしの話まともに聞いてないじゃん！」

「ごめん、ごめん！だっていつも、そう・・・とかうん・・・とか、ひどい時はごめん今話かけないでくれる？とかしか言ってくれないからさ！」

「ああ、そつか。ごめん。今日が最初で最後かもねえ。」「そんなこと言わないでよっ！陽子チン」

そついうと雪太は変顔をして、私を笑わせた。

「ふっ、っふふ。」

「やっと笑ってくれたあ！陽子ちゃん全然笑ってくれなかったもん。俺超うれしい　でもお．．陽子の笑い方ってちよつときこちないね！」

「．．．あつそ！ぢゃあ、一生あんたの前では笑わないから！！」

「ごめん、ごめん！ちよつとからかってみただけだよ！本気でそんなこと思ってないからね」

雪太の明るさは、私の気持ちに太陽があたってるような感じがした。今まで同じ年の子と話していたことはあるが、ほとんどの子は無理矢理元氣なふりして、不自然で、私はこんな無理矢理なことはいとずっと思っていた。

「雪太の病氣は何？」

「俺の病氣？」

俺まだわかんないんだあ。これから検査するらしいけど、それがかなりきついらしいよ！まいつちやうよな！」

「そっ．．．まあ、頑張って。」

「何？それだけえ？？俺もつと心配されてえなあ。」

「病氣もわかんないのに心配するわけないでしょ。」

それから、少したつて雪太の検査が終わり、雪太自身も自分がなんの病氣かを知ってもいいころなのに、雪太は病氣を知らなかった。

「こんにちはあ　陽子チン！」

「おはよ。って、あんたあたしの病室来ていいの？病氣もわかって、治療も始まつてるんじゃない？」

「始まつてるけど、きついんだよなあ、治療。昨日なんかゲボしちゃったよ！」

「・・・そう。」

「何？心配してんの？」

大丈夫だよ！俺どんな治療でも頑張るし、まだ病気はわかんないけど、とにかく治してみせるよ。やりたいこといっぱいあるし！」

『陽子、あたし絶対病気治してみせる。陽子一緒に頑張ろ。そしてら、一緒に中学行こ。』

なぜだか、アツコの言葉を思い出した。

「わかんない病気になに強気になってるの？完璧治るなんて、言いきれない。」

あたし見てみなよ！いつになっても治らないじゃん！！

頑張ったとしても、治らないもんは治らないよ・・・。」

「・・・。そう、じゃあ、陽子ちゃんはずっとこの病院にいればいいじゃん。俺は治すから。陽子ちゃんに病気が治らないって決めつけないでほしいなあ。陽子ちゃんみたいな弱虫に！俺は治すからな！」

初めて見た雪太。

怒ってる雪太。

「・・・ごめん。」

「あつ、別に誤らなくてもいいよ！ちよつと強く言いすぎたね。俺こそ、ごめんね！」

「・・・ぢゃあ俺気持ち悪くなってきたからゲボ吐いてきまあす」

いつもの雪太に戻って、自分の病室に戻って行った。

さつき、雪太に言った言葉を揉み消したい。弱虫な自分を潰したい。そんなことを思ったら、止まらず涙が溢れてきた。

悔しくて、自分がすごく嫌で。

それから、一週間後、雪太の病気がわかった。
アッコと同じ病気だった・・・。

アッコと同じ

雪太の治療が始まってから、雪太は前より私の病室に来る回数が減った。

病室に来たとしても、具合悪そうで、無理してきてる感じがした。

「陽子っ」

「ねっ？こっち来ていいの？なんか無理してない？」

「無理してるよ！無理してでも、陽子と話したいからさ」

「あたし、無理してる人嫌なんだ。」

「そう！じゃあ、無理しない！だから、明日も来れたら来るよ。」

「あの、話わかってる？」

「おわかりですよ」

「...。」

「ねえ、陽子ちゃん、陽子ちゃんって友達一人もいないの？」

「いない。」

「ウソでしょ！俺聞いたよ。大切な友達がいたって...。」

「誰から聞いた？」

「母さんでしょ！くだらないこと話して！」

「あつ、でも聞いても悪い事じゃないじゃん！陽子も普通の女の子と一緒になんだなあって」

「...そう。」

でも、アッコは死んだよ。」

「...じゃあ、俺がアッコちゃんっていう人の代わりになるよ！そうすれば普通の明るい陽子になる」

「あんたがアッコの代わりなんてできない。」

「それほど大切だったんだ。」

「大切だったよ...。」

雪太は少しずつとだけ私の中に入ろうとしていた。無理矢理では

なくて、気づくことのない。

それから3日後雪太が私の病室にこなくなった。

なんとなく心配になったので、初めて雪太の病室に行ってみた。

雪太の病室には雪太の小学校の友達が5、6人ほどいた。

「あら！陽子ちゃん、入口にいないで入りなさいよ。」

ポンと私の肩を叩いて、雪太とそっくりな笑顔でいた雪太のお母さん。

「あつ、別にいいです。ただしばらく私のときてなかったので、ちよつと様子見たかっただけです。」

でも、元気みたいですわね！」

「まあ、今小学校の友達が来てるみたいだから。そつが、雪太の友達たくさんいるから、行きにくいかな？」

「別に全然大丈夫です！元気そうで良かったです。」

「そう？じゃあ、また後で来てちようだい！ユキ喜ぶから！」

「来れたら来ます。」

雪太のお母さんは雪太にそっくりだ。喋り方とか、笑い顔とか。

「じゃあ、私戻ります。」

「はあい！後で来るんだよ！」

「あつ、はい。」

自分の病室に戻り、学校から出された学習プリントをしていたら、雪太のお母さんがきた。

「陽子ちゃん、ちよつといい？」

「あつ、はい……。」

「ごめんね！いきなり来ちゃって。」

あつ！勉強してた？ごめんね！」

「あつ、別に大丈夫ですけど。なんかありました？」

「ごめんね、いきなりい！」

えつとねえ．．．その、雪太の病気のことなんだけどね。」

「．．．はい。」

「その、雪太、陽子ちゃんのこと好きみたいだし、陽子ちゃんには雪太の病気言わなくちゃいけないと思つてね！」

「．．．はい。」

「雪太の病気ね、白血病つていう病気なの．．．結構大変な病気なんだけど、あの子なりに頑張つてるし、もしかしたら治るかもしれない！だから、陽子ちゃんには雪太と仲良くしてほしいの！雪太、陽子ちゃんを初めてみた時から、俺早く元気になつて、陽子ちゃんに俺のかつこいいところみせるんだ！！つて言つていたから。」

「．．．ごめんなさい。雪太君の病気は治らないかもしれないですよ。私の友達が雪太君と一緒にの病気で死んでますから。」

「陽子ちゃんはこれから、そのことをいわないでほしいの！」

おばさん、ユキを信じてるし、陽子ちゃんにもユキのこと信じてほしいの！お願い！」

雪太のお母さんの言葉の一つ一つが重く感じた。

「．．．できればします。」

「ありがとう！！」

これからもユキをよろしくね！」

そついうと雪太のお母さんは出て行つた。

『陽子、将来何になりたい？』

とりあえず、この病院を早くでたい．．．。

『そつだね！それが一番だね

あたしね、陽子と一緒にの中学行つて、一緒にの部活入つて、一緒に頑

張りたいんだ!!
ソフトボールやるの!」

ちょっと勝手に決めないでよ。

『だって、あたしがそう言わないと何もしなそうなんだもん!』

アッコに言われなくても、やりたいことくらいあるわよ。

『何やりたい?』

絵描きたい。

美術部に入って、たくさんの絵を描いて、賞たくさんもらたうの。

『そっか。良かった!じゃあ、あたしが校庭の外でソフトの練習してるところを、陽子はあたしの姿を絵にするの』

それがアッコとまともに話した、会話だった。

台風が近づいてきた、8月中旬。

雪太は今日も私のところに来てない。

「...雪太?」

しょうがなく、私は雪太の病室に行ってみた。

「おうっ!

陽子ちゃん、おはよう。」

雪太は青いキャラクターのバンダナをしていた。
雪太の髪の毛はなくなっていた。

「最近こないけど、大丈夫？」

「心配？」

「正直心配．．．。」

「ありがとう。」

陽子、俺の頭なんとも思わない？」

「バンダナが似合う。」

「そっか！」

ありがとう。俺こんな姿、陽子に見られたら余計嫌われちゃうような気がして、陽子の病室行けなかった。」

「．．．そんなの気にしないで。」

元気な雪太が細く弱まっていた。

「ねえ、陽子。」

アッコちゃんってどんな病気だった？」

「なんで？」

「俺、アッコちゃんと同じ病気になって、なんとなく思っで。」

「だとしたら？」

「．．．俺それでも、そんなこと関係なく、とにかく治すから。」

「うん。」

雪太の病気を治すという気持ちだけは衰えていなかった。
ただ凄く、かつこよくみえた。

「雨すごくなってきたみたいだね？」

「そうだね．．．。」

「テルテル坊主つくろっか！二人で！」

「作ってたつて、外でないでしょ。」

「俺、雨より晴れが好きだもん！」

ねっ！作る！」

「しょうがないねえ。」

それから二人して、ティッシュのテルテル坊主を作った。

雪太の作ったテルテル坊主は、頭だけでかくて、顔いっぱい笑顔のテルテル坊主を作っていた。

「変なテルテル坊主。」

「別にいいじゃんかつ！かつこいいだろ！俺のテルテルちゃん」

それから、雪太の病室の窓に頭のでかいテルテル坊主と頭と体も小さいテルテル坊主をぶらさげた。

仲良く肩を並べたテルテル坊主。

「陽子ちゃん、

俺陽子ちゃんが好きだよ。初めて見たときから。」

「うん・・・ありがとう。」

私も雪太のことが好きだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7801a/>

好きな人

2011年1月13日01時16分発行